

ⅢⅢ 紹 介 ⅢⅢ

マルクス主義とロシア人ジーベル

見 野 貞 夫

資本論に接したことのある人ならば、だれしもN.ジーベルの名前を聞けば、いち早く資本論を理解したロシア人教授だと思っておこすであろう。いうまでもなく、資本論第2版あとがきのなかでマルクスは、ジーベルを自分の理解者として高く評価し、それを可能にしたかれの一貫せる純粹に理論的な立場をば絶賛し、後述のリカード関連の著作をりっぱな作品だと位置づける。

とくに、当時のパリの雑誌レビュー・ポジティビストがマルクスを目して、形而上学的だとか、また、史実の批判的解剖につきて、未来社会における作業を説いていないのではないかと非難したのに、敢然とうけて立ち反論を加え、かれはマルクスを弁護して次のようにいったのである。もともと理論に関するかぎり、マルクスの方法は、イギリス学派全体の演繹であって、長短ともども、最良の経済学者に共有なものを内蔵しているのだと。

ところで、このジーベルを、マルクスとのかかわり合いで一体、どのようにとらえるかはわが国ではもちろんであるが、ソ連でもそれほどほり下げられていないし、意見もまちまちである。そのような背景をふまえて、何らかの前進を期すべく、次の論文は努力している。

Л. Мордухович: Спор вокруг Н. И. Зиберы, Вопросы Экономики, No.11 1974.

それを以下、紹述しよう。

経済学者のジーベルといえは、1871年に“リカードの価値論と資本理論、ならびにこの補遺と解説”(Теория ценности Д. Рикардо в связи с дальнейшими дополнениями и разъяснениями)をかいていることで知られる。これを積極的に評価したのがマルクスであった。73年来、かれはキエフ大学経済学講師、そして教授をつとめてきたが、75年そこに君臨する制度に抗議したために、解雇されることになる。後、1881年、ロンドンを訪問したさい、マルクスとエンゲルスに会っている。かれの大きな

仕事としては、何と云っても“デイヴィット・リカードとカール・マルクスの社会経済論研究”(Давид Рикардо и Карл Маркс в их общественно-экономических исследованиях) “原治経済文化論”(Очерки первобытной экономической культуры)があげられるであろう。前者は学位論文を加工したものであり、レーニンが初期作品で引用している論文でもある。

科学的な作業をもって克服せねばならぬ批判材料の一つに、経済学史のわい曲があげられるだろう。たとえば、マルクスの所説を科学発展の大道から遠ざけて、その源泉の一つとしての古典経済学のもつ意義に目をおおい、その弱点を利用するなど。こうした史例にはケインズの“一般理論”、E. ジャムの“20世紀の経済思想史”、B. セリグマンの“現代経済思想史主潮”、ギャルブレイスの“産業国家論”がある。論者が価値論や分配論をかれら独自の俗流的意味あいでも論じているのに面して、マルクスの経済学と古典経済学との関連を最初に明示したのがジーベルであった。かれは、マルクス学説を普及したりその偽造を暴露するのに大きな功績を残したのであるが、このジーベルの考え方は多様に論じられて、ロシアの文献でもはげしく論争が展開されるかすくすくないフィギュアの一人である。そこで以下、この争点をまず検討し、ロシアにマルクス経済学を普及するのに、かれの占めた位置をば確定する点——これを課題として研究したい。

* * *

たいていの評者はかれの経済論を考えるにあたり、その唯物弁証法の見方に立却する。この解釈の方向は、“反デューリング論”を雑誌〈スローヴォ〉で紹述すべく、かれが送ってきた見解に一面的に注視したものである。しかもう一つ、〈批判概要〉にのった論文には注意を払っていない。この哲学的見解の評定に関しては、論者はボロフスキー (В. Воровский) に賛同するけれども、かれのはレーニンの哲学手稿のあらわれる前に出現した。ジーベルは序文でこういう。

われわれなりに、さまざまな知識分析に適用して、この方法の有用性なり、それが——いかにそれに真実の意義が付与されるにせよ——進化論や普遍的発展論の単純な形態変化とか、方法論のプロトタイプとかを、そもそも代表するかどうかの判定はここでさしひかえたい。あとの意味でこそ著者エンゲルスはそれを研究したのであり、あるいは少なくとも、進化論により達成された真理——若干の点で類似性を発見できることを意識しないわけにはゆかない——のたすけをかりて、それを確定するのにつとめたのである。(〈スローヴォ〉, 11月1879, СТР, 117)。

ここからかれジーベルが進化論者であり、一般的発展の変化として弁証法をみて

いたという結論、そして当人の知識分野に、これを適用しかねるという結論がひきだされてきたのである。こうした解釈は多い。

Воровский: Соч. т. 1, Партиздат 1933, стр. 177-8.

П. Орловский (В. В. と同じ): К истории марксизма в России, Госиздат 1917, стр. 16

И. Блюмин: Рецензия на книгу Н. И. Зибер "Давид Рикардо и Карл Маркса ……"

Опыт критического исследования, Проблемы Экономики, No.3-4 1937, стр. 219

А. Реуэль: Русская экономическая мысль 60-70х годов XIX века и марксизм, Государственное издательство политической литературы 1956, стр. 294

В. Запольский: Н. И. Зибер как популяризатор произведений К. Маркса и Ф. Энгельса (Труды Воронежского Государственного Университета, Общественные Науки, т. LXIX 1958, стр. 136)

Н. А. Цаголов: Н. И. Зибер — первый пропагандист экономической теории марксизма в России, История Русской Экономической Мысли, т. II ч. 2, Изд-во социально-экономической литературы 1960, стр. 74

しかし、この見解を微細に研究してみると、実際、かれは弁証法を科学的に進化する方法と考えるので、けっしてスペンサーばりの俗流進化論でないことが分かる。

かれによると、“反デューリング論”の主要関心は最近の進化論として、弁証法的矛盾法則をみちびきだす点にあると。この場合、ダーヴィンの進化論が指摘されるけれども、そこでは自然科学的唯物論の立場からする盲目的な弁証法論者の立場がみうけられる。弁証法的唯物論が最近に進化した原型プロトタイプだという場合、かれは無条件に正しい。ダーヴィンの盲目的弁証法論やマルクスの史的唯物論にたいして、弁証法的発展変化の一般論は実際、原型である。なぜならレーニンの説明によると、普遍的運動変化の理念はヘーゲルにより、生活と社会への適用以前にすでに推論されていたからだ。社会への適用は1848年マニフェストにはじまるが、自然へは59年の“種の起源”においてみられる。ジーベルは、弁証法にもとづく“資本論”と形而上学とがブルジョア論者によって同一視される状態はあやまりだと強調する。かれにしたがえば、形而上学的方法が過程や事物を静止の状態の研究するには有用であるけれども、運動・相互作用・発展となると、これとは別な弁証法的思惟方法が必要であり、この方法でこそ事物を運動と全体でつかめるのだと(〈批判概要〉No.15 1879)。

弁証法のア・プリオリな仮定的性格のゆえに、マルクスを批判するのは不当であり誤りであることを、かれは力説して、ジュコフスキー(Ю. Жуковский)との論争に

において、ヘーゲルとはちがいマルクスにあっては、意識は事物世界の反映以外の何ものでもないのだといい、そして弁証法的矛盾の法則にアクセントをおく。この立場よりして、ジーベルはJ・S・ミルの論理学をば、帰納・演譯が形而上学的性格でつかまれ、このたすけをかりて発展現象が研究されねばならぬ特別な手続を指摘するのがまれだと批判して、まったくもって発展が自然と歴史の普遍法則だというコトバが一つとしてみいだせぬが、この法則は思惟においても消失しないものであると。運動の普遍性を明かにする思惟の同じく普遍法則として、弁証法的唯物論の大きな意義をみとめて、かれは、〈この普遍法則は対立物の統一という法則の下で、弁証法的矛盾の方法において、われわれの知恵のなかにうつしだされる〉という結論に到着した。

他の知識分野に適用してみても、この弁証法が有用かどうかの判断はさしひかえるというジーベルの主張についていえば、なるほどボロフスキー、プレハーノフ、その他の人びとが弁証法に理解を示さなかったとか、無知だったとかと判定してきたけれども、實際上、ジーベルは、反デューリング論を特徴づけて、次のように述べるのである。すなわち、方法なり法則の観点からいえば、数学、歴史、経済学、哲学の各分野よりエンゲルスがひきだした手法は弁証法的真実を示しているだけに、重大な関心をひくものであると強調する。かれの見解が重要性をもってくるのは、批判的な判定を下すべくは、古典がひきだしてきた手法だけでは不十分なこと、科学やその歴史をよく知る必要があること、こうしたかぎりにおいてである。弁証法の正しさはもちろん科学史によって検証されなければならないけれども、普及の必要からエンゲルスやプレハーノフが対立物の統一を手法の総和として考えがちで、認識法則、客観界の法則として考えていない点は注目してよい。この点、レーニンも指摘するが、更に、ヘーゲル・マルクスの仕事を継承していくことは、人間思想、科学、技術などの歴史を弁証法的に加工することでなくてはならぬとつけ加えた。ジーベルの主張は、研究者のひかえめさや科学的良心のほどを示すものでこそあれ、けっして弁証法的方法への懷疑とか無知を意味するわけではない。当時、かすすくない論者の一人として、かれは自然と社会における因果現象を説明するために、弁証法的方法の意義を的確に評価した。平板な進化論に本質批判を加えて、科学的に敵対物の統一法則が普遍的発展の弁証法、したがって世界の自己運動についての意識のうちにつしだされたものだということを解明しつつ、マルクスの弁証法的思惟こそ事実のふかい研究と一般化の結果なのだということを論証した。そうだからといって、この方法をかれが完全に身につけたというのではない。たとえば、経済

学の個別諸範疇の叙述においては、多少ともあいまいさを残す。とはいえ基本的に
いて、この方法こそ、かれの社会=経済的見解を特徴づけるのに十分な根拠とな
らないわけにはゆかなかつた。

* * *

ジーベルが資本論をロシアではじめてコメンタルした人としては、論者の意見を
を共通にするところである。かれがマルクスの学説をすばらしく知っていて同意し
たのだと解釈する論者もあるが、またかれらは進化論主義的傾向に非難を加えて、
アンガルスキー (H. Ангарский) をのぞいて、ジーベルが経済学における弁証法の意
義を理解せず、マルクス主義に固有な批判的革命的性質は、かれに無縁であったの
だと確信する。その場合、かれに負わせる欠陥として、マルクス経済学と古典経済
学の同一視、資本主義が社会主義に転化する経済的必要性の認識欠落、資本主義を
過度的だとみとめるにせよ、労働者階級的手中に権力が移行する不可避性を考えて
いないこと、こうした諸点をあげる。真実のところ一体、かれは経済学と弁証法を
切断したのだろうか。資本論と反デューリング論をもとに、かれは、社会経済現象
の全体が社会組織にまつわる一定の合法則性をもって、社会=経済制度の発展法則
にのっとって生起する不断の運動過程として観察研究されねばならぬことをわがも
のにし、生活中的弁証法を発見するのに、マルクスとエンゲルス両人がのこした大
きな功績をみとめる。そして曰く。この領域でこそ、著者エンゲルスは弁証的矛
盾のもっともゆたかなえものをばあつめえたのであると。マルクスの功績を単一に
して全体的な研究方法の開発に求めて、これこそマルクスに〈全一連の経済学的諸
発見〉を可能にしたのだとかれは判定する。この思想を具体化して、社会の経済生
活で生じる変化は、社会的な生産と消費の史的ウィラードで存する変化によって決
定されるのだと述べ、この変化に直面しているのが所有の命運だとかれは考える。

更に、ジーベルにしたがえば、社会の経済生活を、イギリスの経済学者がやった
ように不動の状態としてではなく、永劫の運動変化として研究する必要がある、こ
の理解を欠けば、古典経済学研究を何世紀も失わせてしまうのであると強調して
いる。またマルクスにあっては、価値、貨幣、資本、収入、信用、人口法則などでう
つしだされる社会=経済的現象の全体が一律に分業に内的に依存している点を鋭く
考えたがゆえに、経済範疇の発展形態を理解できたのであり、この内的依存に明確
な表象なくば、発展形態は理解されずにおわるとかれは主張する。

経済学におけるマルクスの弁証法的アプローチとか、これと先人たちとの区別、
そして連関をジーベルが正しく理解していた点は資本論の著者みずからみとめると

ころである。第1巻第2版の周知のあのがきには、マルクスの価値・貨幣・資本の理論が基本的に、スミスやリカードの発展する必然的帰結だというジーベルの見解を引用している。そしてそれから6年後、マルクスの価値論とリカードのそれをごっちゃにしたA.ワグナーを批判して、マルクスは、資本論からもジーベルの作品からも、ワグナーがリカードとの差異を当然に知るはずだとマルクスはいう。そのリカードはといえば、価値の大きさの尺度を、實際上、労働としたために、価値と貨幣との間の本質的関連をとらえそこなったのだと。資本論の著者が経済学の起点——つまり商品論において完成した革命的転換の本質理解とか、資本主義の諸範疇のもつ歴史特殊性の解明とかがジーベルの功績である。ところが、マルクスと古典経済学をジーベルが理解できなかったのだという解釈もある。レウエルによると、とりわけ商品と貨幣に関して、マルクスとリカード間の差異をかれジーベルが理解しそこなったのだ。だがしかし、以前レウエルはこういった。すなわち、かれジーベルはマルクスの社会的労働論をかくされた社会的労働として理解し、したがって貨幣の必然性を叙述しえたのである。この問題を剰余価値論において解明するさいに、マルクスの功績を、たとえば、労働の売買を労働力の売買へなど、用語の改善にとどまると、ジーベルは考えてしまったのであると。かならずしもうまくいっていないジーベルの定式化のうえに、レウエルは結論めいた評価をひきだすのであり、それが示す本質的な内容をさけている。たとえば、リカードが労働と労働力との間の差異にアプローチした点を証明し、次のこと、すなわち資本論の著者がいっそう正確に理解されやすい定式化のほかに、一体何を付加しているのかを問題にした。が、このほかにという説明をレウエルは忘れるのに、ジーベルは明らかにする。かれによれば、賃金労働者の労働生産性は史的現象である。古典経済学には労働と労働力との間の差異があいまいに意識されていた。労働と資本の交換問題を解決させなかったのはこのためであり、市場においては価値の普遍的均一化は生産物中に利潤の一部が入ったからとて、何らさまたげられることはない。この問題を解決したのがマルクスであり、これは労働力という特殊な商品を発見し、その保有するより多くの価値を生みだす源泉、交換価値の起源として役立つ使用価値を提示したと。次のことをレウエルはみとめる。つまり、ジーベルの正しい指摘にしたがえば、賃金は内容上、労働力の価値であり、賃金問題にスミス・リカードは非歴史的形而上学的な接近の仕方しか示さなかったと。ブルジョア古典経済学とマルクスの立場が相互に反するというジーベルの理解を、レウエルは一般的形式で示すものの、両者の継承関係の問題は解決できなかったのだという。その同一著者が同書のほかの頁

では、マルクスは、ジーベルを、両者の継承関係を最初に明かにした著名な研究者であると指摘したのだと。マルクスを不易とするかれとしては、まるで、正反対のことをいうのである。

資本論の諸範疇をジーベルが非歴史的にとりあつたのだとするレウエルの見解にたいして、ツアゴロク (H. Цаголов) も批判的だというものの、しかしこのかれとても矛盾した評価からのがれているのかといえ、そうではない。利潤や資本に関するブルジョア理論へのジーベルの反論を、実はマルクス主義的見解のプロパガンダであったのだとして、更には、リカードとマルクス間にあるふかい相異をジーベルがみのがしたと考える。また、ジーベル研究者として、このツアゴロフはジーベルが剰余労働と剰余価値を混同しているか、誤って労働=価値とみなしてしまったのだと批判する。とはいえ、労働の価値については論じえないとしたのだから、かれは語法上、価値をつくる労働を考えに入れたのだが。しかし、ブルジョア古典派を批判して、ジーベルの曰うには、経済学者が労働価値のもとに考えたのは労働力の価値以外のものではない。他面、ジュコフスキーと論争して、かれはカテゴリーに、労働は価値の唯一の源泉であると強調。剰余労働と剰余価値の混同がジーベルにいかに無縁であったかを証明するのには、かれが、マルクスにしたがって、賃金と利潤の相反するリカード的見解の絶対化を批判したことをば想起するので十分であろう。

更に、ジーベルが利潤を剰余価値と混同するリカード水準にあったとか、搾取率と剰余価値率を同一視したとかといったふうに、ツアゴロフは描写しているけれども、実際はそうではなく、可変資本にたいする剰余価値の関係は資本家による労働力搾取度の正しい表現であるが、資本家は、その剰余価値をば可変資本だけにたいしてではなく、総資本支出にたいしても考えるのだが、これは明らかに、正しくないのだとジーベルは言明してきた。それにもかかわらず、ツアゴロフによると、ジーベルの利潤率は主観的範疇にして、総資本にたいして資本家によっておこなわれる正しくない帰属の結果なのである。搾取や利潤率 g の資本家による計算は正確な仕方ではなされるわけではないと述べて、ジーベルは通常の方法をみとめる。利潤率のなかでは搾取度がまったくもっていんべいされてしまう。こうした見解はほとんど、 g を通常の方法にしたがって外観上の搾取度とするマルクスの補足的な反復であるが、かれはいんべい構造を、マルクスの例とパーセントで一致する例をもって、説明している。リカードとマルクスの相互関係を論じたさい、ジーベルは正当にも、マルクス主義の創始者がまずもって、資本主義経済法則の史的性格を証

明し、古典経済学の欠陥をその形而上学的性格のうちにみたのだと主張しているのであるから、かれによれば、まずい定式化やタミノロジーの短所があったからといって、それはけっして、ジーベル議論の本質に変化を与えるわけではなく、その立場をつくろう必要もないであろう。

* * *

マルクスの蓄積論をリカードのにくらべて考えるさい、最近の研究はこの種の問題提起とその解釈そのものをかえてしまった。こうジーベルはみる。

ボロフスキーの意見によると、ジーベルは、資本主義発展の傾向を論じて、マルクスによるリカードならびに、これを生みだした全社会関係の否定、それゆえに両者の史的敵対をみとめずに終ったのである。だが、レウエルはジーベルを協組資本主義のイデオロギーと位置づけつつ、その理由を、かれの経済論が、資本の矛盾がなくなっているが経済的基礎は不動のものとしてのこの新社会機構のブルジョア的シェーマよりできているのだという結論に到着した点に求める。後にレウエルは資本の矛盾が克服される新しい集団的な社会制度のシェーマによって、ジーベルの見解は特徴づけられるとも考えた。この場合、ジーベルによると、こうした社会制度は、資本主義の計画的進化的発展の結果として発生し、その内的再生により出現するのであり、その後、ジーベルは資本主義の自動的崩壊という結論にまでいたったのだと。この解釈されたジーベルにしたがえば、ブルジョア政府の国際的会議のなかに、資本主義の矛盾を克服し生産の専門化(生産手段の専門化ではない)が生じる新制度を組織する可能性がある。これは不合理なシェーマである。この点でジーベルをツアゴロフは批判する。資本主義矛盾の解明のなかにジーベルの功績をみるものの、社会主義の不可避性とか、新機構が旧社会で準備される物的前提により制約されることとかなどへの不十分な理解ゆえにと、ジーベルを批判し、解明した矛盾の意義を理解しそこなっただと、ツアゴロフは評定する。

新旧社会機構の交替をめぐるジーベルの見方についていえば、ツアゴロフはジーベルの資本主義自動崩壊論のシェーマに注意しない点で、これを見とめるレウエルよりも後退する。そのレウエルも、ジーベルが現代のブルジョア国家を支持したり、労働者階級の国家だけが私的独占を国家独占にかえることを理解しなかったと断定する点で、ツアゴロフと見解を同じくする。が、ツアゴロフは更に、この欠陥こそ国家の、とくにブルジョア国家の階級性格をジーベルがみなかったことで説明できるとする。ところが、ジーベルはどうかといえば、すでにマルクスにしたがひ、国

家とか法律の経済への依存性をみとめていて、けっして国家を超階級的だとは考えていない。西欧の現国家を中産層がいる階層フラクション、つまりブルジョアの手の中にある、いろいろな独占の陰影以外の何ものでもないと考え、そして低階層の部分には従属のほか何もないと強調したのである。社会の移行・変転には国家・法の変化をとまなうともみていた。

ジーベルは資本主義の矛盾激化に着目し、それが全世界的な破局にみちびいていくのであり、これにつれて階級闘争も激化するのであるから、資本主義のもとでも労働者の物的条件は改善されていくなていうブルジョア経済学の見解は、当然に反論に値いするのだというのである。かれによると、資本主義は労資間に、現代の大きな社会的衝突の原則が内在し、機械制生産の発展にともなう、恐慌期では貧富両極の間の緊張が強まる。これは労働者の不満をますます強め大きな飛躍を条件づける。資本主義は人類史の一段階にすぎず、その過度的性格は生産の社会化により制約される。けだし、日々、各時間の *bellum omnium contra omnes* によるのみ、その生存は保障されるからだ。マルクスの研究がまるで労働者権利の弁護をめざして、目的の上に手段をおくといった論者^の見解は反論されるべきである。労働者階級は社会運動の史的力にして、それは、貧民やプロレタリア、そして小資本家の掠奪されていく結果、ますます強められる。ジーベルはこういった。

ところで、新機構の創造者をブルジョア政府の国際会議だとジーベルが主張したという断定は正しくない。むしろ、かれは次のようにいったのだ。すなわち、すべてのヨーロッパ諸国が一般市場で、ほかの事情に関連して、衝突すると、工場における労働時間数をちぢめ、蓄積を最小限にし、これとともに権力形態も弱くなる。そうなるならば、国際会議にまったく新しい法的秩序をつくりだせるのだ。だが、実際、こうした国際会議はうまくことがはこばない。むしろ逆に、過剰蓄積がブルジョアジーの手中にある権力形態を弱め減少し、新しい法秩序を画するのだと。

国際会議についてジーベルのいうところによれば、社会の組織ともども国家もかわる。法機関と法組織は、その仕事も含めて、変化する。変化はどこにあるか。この問題には答えぬ。ジーベルは未来は労働者のものであり、そこでは労働者は国家となり、無産者は同志になるという。労働者が国家の首領になって搾取を根絶するのだというラーサル^の見解に同じで、労働者階級の仕事は、真実に、全人類の仕事であるとかれはいう。けだし、労働しうるものすべてについて、つまり健康な成人について議論しているからであると。

この場合、ジーベルは、世界的規模において生産の社会化が展開し未発展な国は

発展した国の関与をさげられぬと考える。ロシアにあっては資本主義はとことん発展しない、というのは、ほかの国がとことん発展するからである。同時に、資本主義は、全世界の人民を階級に分けて、社会的不平等をふかめ、全人民を単一の全労働者階級に結合するから、全国家のブルジョア政治権力をはかりがたく弱める。各国の労働者階級が同時に権力に到着する結果、おのずと国家間会議が形成されなければならぬ。その会議は無産者や労働者の同盟であり、だんだんと法秩序になっていく。資本主義発展の現実的シエマを、そういったふうにジーベルは把握した。またジーベルが考え、ジーベル論者が理解しない秩序も以上のものであった。

だがしかし、労働者階級への権力移行を主張したジーベルがラーサルの次のような正しくない見解をももち合わせていた。すなわち、政治権力を、外的政治的承認のなかに、社会の現実関係のうちで完成する革命の徹底的遂行のなかに求めようとする見解をばである。しかし他面、一般選挙権を礎石とするラーサルとはちがひ、誤って自動崩壊論を展開し、プロレタリアートが権力に着くのは一般的経済恐慌の結果としてのみであるといつて、資本主義の史的傾向と経済的宿命論を同一視した。マルクスにしたがつて、かれのいうことを整理するならば、この機構は生産を社会化しつつ、社会主義の物約条件をつくるだけではなく、労働者のたえがたい不満をもつくる点を理解していなかったといえる。

ジーベルの所説にあっては、新機構の生成における政治要因の役割をまったく正しくなく論じ、あやまって社会発展の史的過程を分析した結果、ことがらのすべての進行を純粹に経済的要因によって説明し、たとえば、強制、権力、国家あるいは何らかの政治的干渉にいちどだつて及ぶのは不必要であるかのようにみなした。その推論はこの機構を永遠化するブルジョア進化論主義の精神において資本主義の発展する史的傾向を理解するのと何の共通性もない。資本主義にかわつて何があらわれるかをかれが知らなかったなんていう見解には賛成しがたく、むしろかれは、新機構を社会主義に特有な性格のものと期待していたのである。

かれによれば、将来国家と社会の経済的協同体が一つの不可分の全体に合致するはずであるが、私経済においては、株式会社であろうと、国営企業であろうと、ひとしく、一つの分業といえども私的性格をまぬがれず、販売のための企業形態でしかなかった。

けれども、いずれここでは、大企業の経済組織は変化し、階級間の差別と闘争は消失し、こうして資本蓄積の終焉がくる。カオスの経営状態にかわつて、人民大衆の計画的な活動が登場する。個体的生存のいかなる不安もない、その仕事は1日5

～6時間内に減少するとき、その場合にはじめて、真実の自由について語りうるし、人びとが認識された自然法則と調和して生きることも語られるのである。かれはそういう。

ジーベルの理論遺産を分析して、この学者の史的立場づけに関しては、評価はわかる。たとえばブルジョア経済学者にかぞえる見方(ブリューミン、レウェル、ザミャトニン〔В. Замятнин〕、ザポルスカヤ〔В. Запольская〕)、いわゆる合法マルクス主義とする見方(シュタイン〔В. Штейн〕)、マルクス主義者と考える人(ポロフスキー、クレインボルグ〔Л. Клейнборг〕)、日和見主義的自由主義インテリとする人(ポロフスキー)。この立場づけにおいて何よりもまず近い立場にあるのはツアゴロフであろう。かれによると、ジーベルはロシアにおいてはじめてマルクスの経済理論を宣伝＝普及した人であり、労働者階級のイデオロギー勝利に寄与したけれども、資本主義の消失において労働者階級の積極的な役割を理解しなかったのであるから、真に科学的なマルクス主義の頂点にはのぼりえなかった。更に、かれにしたがえば、ジーベルは、プロレタリアの革命と独裁の見解にはいたらず、したがってどのように特徴づけようとも、かれをマルクス主義者と呼ぶのは正しくない。

ジーベルはマルクスの最初の伝導者にして、その方法のようご者である。ジーベルが登場するのは、マルクスやエンゲルスの作品がナロードニキの精神、すなわちロシアが資本主義ならびにその欠陥をさけて通らねばならぬという見解でうけとめられ論じられたときであり、そしてマルクス経済理論を批判から守りつつ、ジーベルは、マルクスとイギリス古典派との間の関連と差異を解明する必要性を理解した。資本論が世に出るや否や、ブルジョア経済学は古典経済学との一切の関連を切断しようとしたと指摘して、かれは、史上はじめて文献でこの問題を予めとりあげたので、かれの作品は最近まで、ブルジョア経済学による経済学史における歪曲に反対していく作業にとり大きな意義をもっていた。かれは労働者の利益をようごして、資本主義の史的進歩性を、階級敵対と権利へのプロレタリア接近を説明した。そして、生産手段の社会的所有で条件づけられた社会主義の特色のいくつかをみとめた。

ジーベルはブルジョア関係の廃絶より政治革命が先行せねばならない脈らくをみとめないが、これはジーベルにかぎらず、マルクスやエンゲルスの側にたった多くの若い教授連に特有な、マルクス主義にたいする未理解である。かつてエンゲルスが次のようにかいたのも、このあたりの事情を考慮してのことだろう。曰く、若いものが往々にして、経済的側面にしかるべきよりも多くの意義を付与する点でマルクスと私はときには責任を負うのである。われわれとしては、反対者に反論するが、

反論する重要原則を強調しなければならなかったし、強調せねばならないのであり、相互作用に関与する他のモメントにも当然に与えられる時間や場所、可能性がかならずしも発見されなかったと。そのほか、ジーベルは労働運動が未発展だった条件のもとで登場したので、マルクス主義を宣伝することにかぎられて、アジテーターにはまだ高まっていなかった。その結果、本質的に〈古い唯物論の欠陥〉を克服できず、がいして〈革命的実践活動の意義〉を評価できないまま、マルクス主義、そしてマルクスを〈……中途半端な、一面的にして死せる唯物論と考えたのである〉(レーニン)といえるだろう。